





# 年上のヨガ講師～汗ばむ夜のレッス ン～【体験版】

蜜夜文庫

く 汗ばむ夜のレッスンく

蜜夜文庫【体験版】

## 第一話 汗ばむ夜のレッスン

残暑の夕方、駅前ビルの三階に「スタジオ・ルーナ」の看板がぼんやりと灯っていた。

涼太がここに通い始めたのは、先月受けた健康診断の結果に肩を落としてからだった。二十四歳、会社員二年目。朝から晩までパソコンの前に張りついて、気づけば肩も腰も鉛のように重い。数値が並んだ紙を見せられ、産業医に「今のうちに体を動かす習慣をつけたほうがいい」と言われたとき、真っ先に頭に浮かんできた、駅のホームでよく見かけるヨガスタジオの看板だった。

口コミサイトを何度も見返し、女性ばかりだったら気まずいだろうかと思ひながらも、涼太は思い切ってドアを開けた。中は思っていたより静かで、線香のような穏やかな香りが漂っている。

「初めての方ですね。今日からよろしく願います」

受付で待っていたのは、想像していたよりずっと落ち着いた雰囲気的女性だった。胸元の名札には「美月」とだけ書かれている。年齢は三十四、五だろうか。飾らないひとつ結びの黒髪、化粧気の薄い顔立ち。けれど動くたびにしなやかに伸びる体の線には、若さだけでは出せない独特の色気があって、涼太はうまく目を合わせられなかった。

「体、硬いですね」

レッスンは始まってすぐ、美月は苦笑しながら涼太の背中にそっと手を添えた。

「力を抜いて。呼吸に合わせるだけでいいので」

手のひらの体温が、薄いコシャツ越しにじんわりと伝わってくる。それだけのことに、涼太は妙に動揺し

た。他の生徒たちはベテランらしく、涼太だけが明らかに浮いている。恥ずかしさで顔が熱くなるのを誤魔化すように、言われた通り呼吸を整える。吸って、吐いて。美月の声はゆったりとしていて、聞いているだけで肩の力が抜けていくようだった。

「上手です。涼太さん、筋がいいと思いますよ」

名前を呼ばれた瞬間、心臓が跳ねた。まだ二回しか会っていないのに、この人は生徒の名前をちゃんと覚えていた。それがただの職業意識なのか、それとも――そこまで考えて、涼太は慌てて首を振った。相手は講師で、自分はただの新人生徒だ。年齢だって一回りほど違う。そんな相手に妙な期待を抱くなんてどうかしている。

レッスンが終わる頃には、スタジオの中は汗と熱気でむっとうとしていた。窓の外はすっかり日が落ち、蒸し暑い夜風が網戸から入り込んでくる。他の生徒たちが着替えを済ませて三々五々帰っていく中、涼太だけが片付けを手伝う形で残っていた。

「今日はお疲れさまでした。体、ほぐれたと思います」

マットを丸めながら、美月がふと漏らす。

「涼太さんくらいの年齢の子が真面目に通ってくれるの、講師としては嬉しいです。うちの生徒さん、平日夜はどうしても年上の方が多くて」

「美月さんは……その、ずっとこのお仕事を」

「もう十年になります。三十四だから、ちょうど人生の折り返しですね」

さらりと年齢を口にされて、涼太は驚いた。落ち着いた雰囲気からもっと上かと思っていたけれど、実際に数字を聞くと、十歳という差が急に生々しく感じられる。自分が生まれてから今日までの半分近くを、この人はもう社会人として過ごしてきたのだと思うと、不思議な気持ちになった。

「意外そうな顔してますね」

「あ、いえ……すみません」

「謝らなくていいですよ。よく言われますから」

美月は小さく笑って、マットを棚に戻した。その拍子に、結んでいた髪がひと房ほどけて頬にかかる。指先でそれを払う仕草が、なぜか涼太の目に焼きついた。

「涼太さんは、体を柔らかくして何かしたいことがあるんですか？ わざわざ夜のクラスまで来るくらいだから」

「特に理由なんて……あ、いや。健康診断で引っかかって、このままじゃまずいなと思って」

「正直でいいですね。無理にかっこつける人より、そういう人のほうが長く続くんですよ」

美月は涼太の隣に腰を下ろし、ペットボトルの水を差し出した。受け取るときに指先が触れて、涼太はまた変な緊張を覚える。汗ばんだ肌から立ちのぼる石鹸のような匂いが、狭い更衣スペースにふわりと漂った。

「無理せず続けてください。体は裏切らないので」

「はい……頑張ります」

「楽しみにしてますね、涼太さんの成長」

その言い方に他意はないはずなのに、涼太の胸の奥では何かがくすぶり始めていた。年上の女性に対して抱くにはあまりに不釣り合いな感情だと分かっているながら、スタジオを出て夜道を歩く間じゅう、美月の指先の感触が消えなかった。

駅までの道すがら、涼太は何度も自分に言い聞かせた。相手はただの講師だ、深い意味なんてない、と。けれど帰りの電車の窓に映る自分の顔は、どこか浮ついていて、いつもより表情が緩んでいる気がした。

翌週も、そのまた翌週も、涼太は同じ曜日の同じ時間にスタジオへ足を運んだ。回を重ねるうちに、体の硬さが少しずつほぐれていくのが自分でも分かった。けれどそれ以上に楽しみになっていたのは、レッスンの合間に交わす美月との短い会話だった。仕事の愚痴を漏らすと、美月は笑いながら「涼太さんは真面目すぎるんです」と軽く肩を叩いてくる。そのたびに、涼太は自分でも呆れるくらい浮かれた気持ちになった。

三度目のレッスンの帰り、たまたま同じ電車のホームで美月と鉢合わせた。

「あ、涼太さんも同じ方向だったんですね」

「はい、いつも一本後の電車に乗ってたので気づきませんでした」

「じゃあ、たまには一緒に帰りましょうか」

たわいもない申し出のはずなのに、涼太の胸は跳ねた。電車に揺られながら交わす他愛のない会話——好きな食べ物、休日の過ごし方、学生時代の失敗談——そのひとつひとつが、涼太の中で美月という人の輪郭を少



しずつ濃くしていった。降りる駅が分かれる改札口で、美月が軽く手を振る。その笑顔を見送りながら、涼太は自分の気持ちがある後戻りできないところまで来ていることに、うつすらと気づき始めていた。

来週もまたここに来よう。涼太はそう思う自分に、少しでも戸惑っていた。